

名城大学機械会誌

発行所

名古屋市天白区塩釜口1丁目501番地
名城大学理工学部機械システム工学科内
名城大学機械会
TEL 052 832 - 1151 (代)
FAX 052 832 - 1235

名城大学機械会 第53回総会のご案内

下記のように第53回総会を開催します。

会員諸氏の多数の御出席を心よりお待ちしております。

名城大学機械会 会長 渡辺 治比古

- 日時 平成22年6月20日(日) 9:30~10:20
場所 名城大学 共通講義棟南館 S-402 講義室
議題
- ・平成21年度 事業経過報告および会計報告
 - ・22年度事業計画案および予算案
 - ・その他

なお、終了後 理工同窓会総会、講演会および懇親会が開催されます。



第9回 新春交流会 講演会 “ふとん名人” 丹羽 正行 氏【藍綬褒章 受章(平成21年 春の叙勲)】

ご 挨拶

機械会会長 渡辺 治比古
昭和57年卒



機械会会員の皆様におかれましては、日々ご活躍のこととお喜び申し上げます。また、日ごろより機械会の諸活動にご支援、ご協力を賜り誠にありがとうございます。

昨年は100年に一度と言われる不況で、トヨタ自動車を中心とした中部の関連企業は軒並み業績悪化に見舞われた事と思われます。9月には自民党政権から民主党政権に変わりましたが、未だ雇用情勢などの日本経済は回復基調に無く、デフレ傾向が一段と加速し企業収益性はよくなっていません。企業の採用人数も昨年と比べ軒並み減少し、学生諸君に於いては就職氷河期となっています。

そんな昨年の出来事を振り返ると、年末に発表された漢字の「新」に表される様に、米大リーグのイチロー選手が樹立した9年連続200安打の新記録、新型インフルエンザの猛威、ゴルフ界では石川遼の史上最年少賞金王など新し尽くめの年だったのではないのでしょうか？

機械会でも総会を6月に変更し、それにあわせる様にホームページを開設しました。今まで機械情報は会誌のみでしたが、ホットな情報が会員皆さんに届くようになりました。まだまだ、内容は挨拶や会則、評議員紹介、機械会誌掲載などですが、今後はホームページを故郷だよりとして会員皆さんの身近な声、例えば同年の同窓会開催状況や大学研究室の最新研究内容などを伝えていきたいと思っています。各種交流会や企業情報の交換にも使っていただきたく、会員皆さんからの投稿をお待ちしております。また、11月1日に第1回の機械会杯のゴルフコンペを名古屋グリーン西コースで開催しました。21名が参加し年代を超え和気あい

あいとした楽しい1日が過ごせました。ちなみに優勝はS42今年年卒の酒井さんでした。詳しい内容はホームページに掲載してあります。第2回目は10月31日(日)に予定しています。是非多くの方の参加をお待ちしています。

その他の同窓会行事では11月28日(土)に大学主催の『30周年ホームカミングディ』が開催され、30年を迎えた卒業生が旧交を温めました。今年はS56年の卒業生の皆さんです。

毎年恒例となりました新春交流会も9回目を数え、春の叙勲で藍綬褒章を授章された丹羽さんのご講演や皆さんがお世話になった佐藤先生と鈴木先生が勇退されるのに先立ち、記念品と花束を贈呈するなど恩師、会員の方々との交流活動も活発に行いました。今年度は10回目の節目ですので、昨年以上に多くの方に参加いただき、皆さんで盛り上げていただきたいと思います。

機械会では卒業生教員の問題に取り組んでいます。ここ3年～4年の内に、機械会へご尽力いただいた卒業生教員の方々4名が退職されます。大学と同窓会は共存共栄でなくてはなりません。その為には一人でも多くの名城大学卒業生が大学に残り、教員となって活躍する事が必要で、会として支援していきたくと思っています。

最後に、今年は十干十二支で言うと、庚寅です。「庚」は「金の兄」すなわち金属や鉄を意味し、「寅」の字は更(あらたまる)で、草木の成長が行き詰まり、新たな形に変化しようとする状態を起こすことを意味するそうです。寅は躍動感のある象徴であり、「寅」の字は「動く」意味で、春が来て草木が発生する状態を表しているそうです。今年こそ“金”に関わる機械会の人々が“新しくChange”する年と確信しております。

名城大学機械会 第10回・新春交流会 開催のお知らせ

1. 日 時：平成23年1月29日(土) 時間未定
2. 会 場：名古屋ガーデンパレス(名古屋市中区錦3-11-13)
3. 会 費：10,000円
4. 問合せ先：渡辺 治比古(機械会会長)
TEL 090-9126-3757 メール watanabeh@shinmei.co.jp

機械システム工学科の近況報告

機械システム工学科

学科長 小島 晋爾



平成22年度が学科長2年目となる小島です。

昨年度は、機械システム工学科にとっても、学科長としても大変忙しい年度でした：

(1) 江上学部長時代に立ち上がった理工学部再編改組のための委員会が解散し、新学部長のもとで新たに組織されたものの。結局、委員会提案は教授会で却下。

(2) JABEE（日本技術者教育認定機構）のコース継続審査が行われ、何とかパス。（ただし、正式な通知は本年6月頃）。

(3) 日本機械学会東海支部の第59期総会・講演会を名城大学において開催。機械システム工学科及び交通科学科の教員で実行委員会を組織し、大過なく終了。

(4) 1昨年度に比べて、昨年度の就職状況は一転して厳しいものとなった。（これについては、就職委員を務められた大道先生からの御報告があると思います。）

（なお、今年度の機械システム工学科への入学者は115名：定員101名，充足率1.14。他に工学系入学者：充足率1.16が2年次への進級時に配属される予定。）

今年度は、上記の(2)(3)が無いので、昨年度よりは幾分の心理的余裕があります。しかし、とりあえず1年間先送りされた理工学部の再編改組を限られた時間の中で議論かつ準備すること、依然として厳しい就職戦線を本年も乗り切ること（就職委員は江上先生）、さらに、山積した学務上の問題点の整理と解決を図らねばなりません。

ちなみに、昨今、ようやく企業においても、新人の学力低下が認識され、過去の「ゆとり教育」の改訂が実施されました。しかし、遅きに失した感があります。思うに、大学教育に「学習指導要領」は存在しません。大学教育とは無関係に「ゆとり教育」が進められた結果、今や、大学教育の

内容自体を変える必要があるようにも思えます。実社会で活躍される卒業生の皆様は、どのように感じておられるでしょうか？是非、ご意見を伺いたく思います。

さて、昨年度末に佐藤進先生と、鈴木勝博先生が退職されました。お二人とも実に45年以上の長きにわたり、機械システム工学科に御貢献頂いたということで、卒業生の皆様とともに感謝申し上げます。また、お二人に替わり、本年4月より新たな教員として、塚田敦史助教と松田淳助教をお迎えしました。いずれも30代の若さでありますから、当科に新たな風が吹くことを期待しております。

日本の政治も夏の参院選に向けて風雲急を告げています。世界的にもエネルギー・環境問題や天変地異（大地震の続発、火山の噴火）など混迷の収まる気配はありません。皆様方の変わらぬ御支援を期待しつつ、近況報告の筆を置かせて頂きます。



学科長杯 & 名城大学機械会杯

争奪ソフトボール大会 [第40回記念大会] 開会式

(平成21年9月)

着任のご挨拶

設計システム分野

助教 塚田 敦史



私は、北海道東部の帯広市に生まれ育ち、1999年に北海道大学大学院機械科学専攻博士後期課程を修了いたしました。在学中は少子高齢化が顕在化されはじめ福祉機器（電動車いす）の研究活動を行っておりました。その後、現場経験を積み上げたい思いから埼玉県にあります国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所に奉職しました。以降、東京電機大学理工学部、再度国立リハセンターへ奉職、東京大学大学院工学系研究科を経てこの度、名城大学に着任いたしました。

国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所福祉機器開発部へ着任した当時は、福祉用具法の制定もあって福祉機器の研究が促進され活発化しておりましたが、一方で様々な研究出力が当事者（ユーザ）にとって稚拙で役に立たないとの厳しい指摘がなされ始めた時期でもありました。当時の上司から課せられたのが“真にユーザに寄与できる福祉機器の設計プロセス／開発研究の枠組みを構築せよ”という途方もなく大きな課題でありました。そしていきなり高齢者介護施設に介護職員成り済まして約3ヶ月送り込まれました。「機械」は人の役に立つものであると機械に携わる身として誰もが考えると思います。「真に役に立つための機械をどう設計するの?」となった時、“対象となるユーザはなかなか本音を言ってくれない”ことを実感させることも目論んだ上司の策でありました（後で知ったことですが）。振り返るとその後の研究や教育において非常に貴重な経験となりました。設計工学でいいますと、設計につながる種や課題を抽出していく上流の領域にあたり、学問的な体系の難しい研究領域です。しかしこの後、数度所属は変わっても縁があって(?)設計の上流領域に関係する研究や教育に携わってきました。

東京大学大学院では、機械工学専攻にデザインイノベーション社会連携講座の発足に伴い奉職しました。機械系の専攻の中にあって“工学設計と

デザイン”の融合を目標とした6企業100%出資という例を見ない講座でした。昨今の韓国や台湾などアジア周辺のものづくりの台頭は目覚ましく、特に技術力の向上のみならずデザイン力の発展に危機感を抱いていること、性能向上といった技術躍進は当然必須であるがそれだけでは対抗しきれない恐れがある、ことが言われ始めております。またEdesignEは、“設計”、“デザイン”などと訳され、日本では“設計”と“デザイン”は通常別領域と思われておりますが、国外ではEdesignEに日本のような切り分けがなく一体で考えられております。この点が日本のものづくりの弱さにならないためにも、逆に（極端ですが）機械工学専門のデザイナーとなれば強みになるとの考えもあり工学設計×デザインの研究や教育を確立していく必要性を下に一員として活動しておりました。発足同時は私自身もデザインを芸術の一部としか捉えておらず、試行錯誤の連続でしたが、単に“デザイン（意匠）を上手に表現できること”ではなく”ユーザを深く洞察し、潜在している設計（デザイン）課題を顕在化して表現する“目線をもつデザインの奥の深さに一言では表現できない重要性を持ちました。これらも設計の上流領域における研究・教育活動でありました。

設計の上流領域は、工学の視点からみますと曖昧さが多く数値のみの議論にはなりにくいことが理解を難しくしております。設計の一分野として成長して成人式を迎えるまではほど遠いですが、機械工学として必要な基礎的な設計教育に、これまでの経験を踏まえた観点をどのように加味して学生に伝えていけるか切磋琢磨しながら教育に尽力したいと思います。最後になりますが、名城大学の更なる発展に少しでもお役にたてますよう努力していきたいと考えておりますので、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

熱システム分野

助教 松田 淳



私は愛知県に生まれ、平成16年(2004年)に東京大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻を修了しました。その後、約3年程宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部(当時)へ勤務し、更にその後3年弱、名古屋大学航空宇宙工学専攻に勤務しておりました。

大学院学生時代から宇宙研勤務時代までは、宇宙往還機の再突入時の空力加熱環境予測及び熱防衛手法開発に関連する研究に取り組んでおりました。

スペースシャトルに代表される宇宙往還機は秒速8km程度の速度で地球大気に再突入します。このとき、往還機前方には非常に強い衝撃波が発生し、その背後で気流が高温高圧状態に圧縮されます。このため、気流の解離、電離が起こり、更には原子分子の励起脱励起に伴う輻射(発光)現象が発生します。輻射は往還機表面に到達すると輻射加熱の形で空力加熱に寄与し、突入速度が増加するほど影響が顕著になると言われています。

再突入熱空気力学の分野は、アメリカの「スターダスト」(2006年帰還)、日本の「はやぶさ」(2010年7月帰還予定)などのサンプルリターンミッション(彗星のチリや小惑星の岩石サンプルを地球に持ち帰るプロジェクト)を契機として1990年代半ば頃から活発に研究が行われるようになりました。その理由は、これらミッションでは、地球への再突入速度が秒速12km以上と従来のスペースシャトルに比較して飛躍的に増大したため、未曾有の空力加熱環境に曝されると予想されたためです。このような背景を基に、再突入飛行環境を模擬するための高速衝撃波管を用い、衝撃波背後の熱化学状態計測手法の開発、電離機構の解明等を行ってきました。これらの研究は、空力加熱環境そのものを理解し予測するために行ってきました。

一方で、加熱からの防衛手法構築に関する研究課題もあります。従来の空力加熱防衛手法としては、飛行体表面に昇華しやすい材料をコーティン

グする方法(アブレーション法;アポロ、スターダスト、はやぶさなど)や、飛行体を耐熱タイルで覆う方法(スペースシャトル)などがあります。しかし、これらの熱防衛手法は使い捨て型(シャトルの耐熱タイルもフライト毎に貼り替え)の手法であり、熱防衛材も含めた完全再使用型の宇宙往還機の開発は運用コストや効率の低減に繋がると期待されています。そこで、再突入時に発生する飛行体周りの弱電離プラズマ流を、磁場を用いて制御し加熱率を低減させるアイデアが注目を集めています。大学院修了後の宇宙研勤務時代にはこの目的のために、地上模擬実験としてのプラズマ発生装置を用いて、弱電離プラズマ流と磁場との干渉効果を調べる実験研究にも従事していました。

名古屋大学へ異動後は、「プラズマ」や「衝撃波」をキーワードして、超音速流とレーザー生成プラズマとの干渉効果による超音速飛行体抵抗低減手法の実証実験、高速自由飛行射出装置(バリステックレンジ)の立ち上げ、同装置によるソニックブーム近傍場波形の計測、ソニックブーム遠方場での乱流との干渉効果、非化学推進等の実験的研究に取り組んできました。また、依然として現在に至るまで、プラズマ(電磁流体)、衝撃波を伴う現象に強い興味を抱いており、航空宇宙分野に限らず身近な応用例を広く模索しています。

今後は、これまでの研究で培った経験を生かしつつ「守備範囲」を広げながら、教育研究活動に取り組むたいと考えています。特に学生には、学部で習得する専門科目はそれぞれ関連性があり、「ものづくり」特に設計段階において有用な「生きた知識である」ことを講義や卒研を通して伝えて行けたらと思っています。

名城大学はこれまで、多くの素晴らしい先生方や卒業生の御尽力により発展しており、現在もより良くする方向に更に御尽力中と聞いております。私もスタッフの一員として、早く「一人前」になり発展に貢献できるよう努力していきたいと考えております。今後も御指導、御鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

佐藤 進先生、定年退職される



佐藤 進先生は、本年3月を以って本学を定年退職されました。

佐藤先生は、本学理工学部一部機械工学科（当時）を昭和37年3月に卒業され、同学科に奉職されて以来48年間の長きにわたって、特に熱工学関連分野において教育と研究に永年尽力をされて来られました。奉職された当時は、理工学部は中村校舎（名古屋市中村区新富町）での教育・研究業務に専念され、当時としては先進的分析装置であるガスクロマトグラフィーによる幾種かの気体の定性・定量分析に携わっておられました。昭和42（1967）年に理工学部は現在の天白校舎に移転し、中村校舎当時よりは教育・研究環境が相当整備されつつ、伴って佐藤先生の研究テーマも順次拡大充実されました。すなわち、先のガスクロマトグラフィーによる分析研究は継続しつつ、校舎移転による熱工学実験室の拡大と相俟って、大型実験装置である衝撃波管（Shock tube）の設計・製作に数年邁進され、改善しつつ予備実験でのデータも整い、その後本格実験でのデータを他大学の共同研究者との検討を重ねてその成果を専門学会に発表されました。その間奉職以来、理工学部技術員、同助手として精勤され、昭和51年4月に専任講師に昇進されました。

その後は専門の講義（主として、熱エネルギー工学関連）や実験・演習および卒業研究を通して熱心に学生の教育に邁進され、その気さくな人柄から多くの学生に慕われておられました。

なお、機械会での活動においても長い間、庶務・会計・編集幹事を積極的に遂行され、当名城大学機械会の発展に多大な貢献をされておられます。本年1月開催の機械会「第9回・新春交流会」において渡辺会長より、その功労を称え感謝状および記念品が授与されました。

先生は、この3月初旬に体調を崩されておりましたが今は快復し、今後益々のご壮健ご活躍を祈念し、佐藤進先生の定年ご退職を謹んで会員諸兄姉にお知らせ申し上げます。

筆者は昭和42年4月に理工学部機械工学科（現機械システム工学科）に奉職し、上記、佐藤先生と同じく熱工学分野（現熱システム分野）に所属し、現在に至っております。

したがって、当初から数年間は佐藤先生の下で、教育や研究に関するご指導を仰ぎました。貴重な紙面をお借りして、佐藤先生に深甚なる謝意を表します。

[機械会副会長 前田 隼（昭和42年卒）記]

鈴木勝博先生、定年退職される

機械システム工学科

設計システム分野 教授 大槻 敦 巳



48年間の長年にわたり本学科、特に設計システム分野において教育・研究に携わってこられました鈴木勝博先生が、本年（平成22年）3月31日をもって退職されました。柔道などで鍛えておられたせいや常々、偉丈夫な先生とお見受けしておりましたが、いたしかたない事情（腰痛）のため、定年までまだ2年を残して退職（みなし定年）されたのです。

先生は、本学理工学部機械工学科を昭和37年3月に卒業後、同年4月より機械工学科に技術員として勤められ、その後助手をへて昭和52年4月より講師になられており、この間久しく、後輩の教育および研究指導に情熱を傾けて来られました。学生実験では歯車の精度測定等、講義では、設計製図や機械要素、機械システム設計等を担当し、また研究では溶接強度やボルトの疲労等の実験的解析に尽力を尽くすなど、多くの学生の教育・研究にあたられました。一方、当機械会におかれましても庶務幹事や編集幹

事などの役員、機械会総会、機械会誌発行などの行事を通じて多大な貢献をされていたことと思います。

名城大学の紛争・混迷の時期から成長・安定期に至る今日まで、48年間の間名城大学の生き証人として、古い駒方校舎や中村校舎時代の苦勞なども知り得る貴重な先生でありましたし、ご教示を受けた卒業生諸兄姉はご存知かと思いますが、先生は真面目で温厚篤実な魅力溢れる先生でもありました。先生のご退職はいろいろな面で感慨深いものがあります。

今後、益々ご壮健にてお過ごし頂けますことを祈念しますとともに、紙面をお借りして先生のご退職を会員諸兄姉にお知らせ致します。

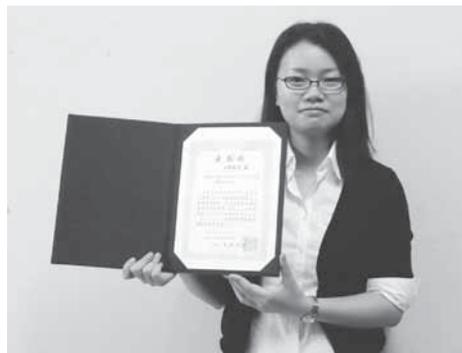
なお、当面半年間は非常勤講師として、在職中と同じ「機械システム設計基礎」の授業を引き続きご担当頂いております。学内等でお会いになられることがございましたら、親しくお声をお掛けくださり、四方山話などに華をお咲かせ下さいませようお願い申し上げます。

トピックス

日本材料学会第58期学術講演会 優秀講演発表賞受賞

機械システム工学専攻【固体システム分野 / 来海研究室 上野裕美】

愛媛県松山市にある愛媛大学にて開催された日本材料学会第58期通常総会・学術講演会におきまして、名城大学大学院理工学研究科機械システム工学専攻の上野裕美さん（修士1年）が優秀講演発表賞を受賞しました。この賞は、総会・講演会におきまして満35歳未満の発表者のうち優秀な発表に対して贈られる賞で、全国で6名の社会人ならびに学生が受賞しましたが、上野さんはその中の一人に選出されました。発表題目は「電着すず薄膜におけるウィスカーの成長機構に関する研究」で、すずめっき層から時間と共に発生するウィスカー（ひげ状の単結晶の微小金属繊維成長物）の成長因子について研究した成果を発表しました。



受賞した上野さん

名城大学機械会 ホームページ更新について

ホームページは、昨年開設されて1年が経過しました。

開設にあたっては、機械会会員の皆様に大学の近況報告と機械会の活動報告の役割を担っております。

今年度からは、HPを3ヶ月ごとに更新して、新鮮な情報を発信いたします。話題の提供と、会員相互の情報交換ができる場になればと考えております。

今後の企画として、各研究室の近況、活躍する会員の紹介などを掲載する案を検討しており、皆様からのさまざまなご意見や情報をお待ちしております。

是非、下記のサイトをご覧ください。



図1 機械会ホームページのトップページ

URL <http://meijo-rikou-dousoukai.jp/kikaikai/index.html>

近況報告

職人系技術者

丹羽ふとん店（名古屋市熱田区）

店主 丹羽 正行

昭和48年卒



昭和61年3月の「第5回技能グランプリ」において、『内閣総理大臣賞』を手にしてから25年も過ぎようとした平成21年4月29日に『藍綬褒章』の栄誉が舞い降りたことは、驚くよりも自分にその価値があるのだろうかと自分に問いかけたのを覚えています

機械科を卒業したにもかかわらず、ハイテクの産業ではなく、いわゆるローテクのハンドメイドの業界に身を置いたのが功を奏した感があります

ハンドメイドの仕事はすべてが「勘」に頼る面がありますが、その技術を受け継ぐには親とか親方からの技術習得・伝承によるわけですが、私には不合理に見えたり思える点が多々あったので、自分が納得の出来る技術を知るために、当時はかなり高価だったビデオカメラを購入し、上手とか名人と呼ばれていた職人を訪ねては仕事風景をカメラに納めました、その映像を何度も何度も繰り返し見ては細かい手先の動きを真似し、図面に工程を書き上げてふとん作りを自分なりに、理解し実践をして技術を習得しました

しかし、私の意識の中には全くと言っていいほど「ローテク」との認識はありませんでした、機械工学科で学んだ基礎知識と学問が随所に活かされた事が今回の授章に結実していると思っています。実習や実験後のレポート作成も、自分の技術の欠点を見直し次の製作にフィードバックさせ、より良いモノを作り出す原動力にもなったと思います

師匠を持たない私が、業界に入ってから13年目に職人の世界の頂点に立ってしまった事は、一部の職人の中に驚きよりも不満を募らせ「おまえは職

人ではなく、技術者だ!」との言葉を頂戴したこともありましたが、今では有り難い言葉だったのかもしれない、身体で覚えることも必要でしたが、学んだ知識を生かした職人系技術者になれたことは機械工学科で学んだ様々なことの証であり、私の誇りでもあります

今では「ふとん作りは天職」と思っております



講演会（表紙）終了後に、褒章功勞に対し機械会渡辺会長より表彰状および記念品を授与される

（平成22年1月）

近況報告

中国 広州駐在を終えて

富士精工株式会社

製造一課 課長 蓮 沼 義 浩

昭和63年 卒



機械会会員の皆様、先行きの見えない日本経済のどん底の中で、日々の生き残りを掛けた厳しい毎日を送っていらっしゃる方が殆どではないでしょうか。

私の勤める会社も例外なく、厳しい状況の中で死活をかけた戦いに忙殺されながらも、“陽はまた昇る”を信じて懸命に頑張っています。

私は今年3月に5年間の中国広州での赴任を終え、帰任いたしました。

海外赴任は二カ国目となり、95年から2000年の5年間はアメリカ駐在も経験しておりますが、新興国の代表格である中国と経済先進国アメリカ、日本を比較しながら中国広州の5年間の振り返ってみたいと思います。

04年2月、初めての中国大連への出張が私としての中国デビューとなります。

その当時の印象は、貧しい国、危険な国（反日感情が強い）、不衛生、遅れた国でした。ただ大連という土地柄がもしかかもしれませんが、不思議と自分が幼少の頃の日本がダブって見えたのです。最も心配していた反日意識は実感できず、危険と思うような事態に遭遇したことはありませんでした。そして国民の貧しさという面に関しては、思っていたよりは酷いと感じませんでした。ただし衛生面は正直言って幼少の頃の日本とも明らかに違い、百歩譲ってもそれは無いだろ？と思うことが結構ありました。

出張目的である機械作業の指導においても当時は抵抗無く進行し、真剣に私の教えを受け入れてくれましたので、事前に入手した中国人社員の特徴とは？みたいな情報と違うことに拍子抜けし、日本とあまり変わらないじゃないかと思った記憶があります（これが後に大きな間違いという事に直面します）。

こんな出張ベースを約8ヶ月ほどした後、会社から広州新会社の総経理（社長）で行ってくれとの話が突然来ました。アメリカで工場長の立場で赴任した経験はありましたが、規模の大小あれ会社トップの経験・知識などはまったく無く、会社には悪いのですが冗談もいじ加減にしてくれ！と思いました。勿論こんな話に冗談のはずが無く、押し切られる様に受ける事になりました。ただアメリカ赴任時の三十歳で工場責任者という辞令を受けた緊張ほどの衝撃は無かった事は事実です。三十歳の若造が、大柄なアメリカ人相手に指示命令なんか出せる訳ない、無理だ！と真剣に思いながらも赴任しましたが、やってみれば結構出来てしまった経験があったからです。

しかし今度は会社トップ、それも立上げ初代の総経理です。これには流石（自分で言うのも何ですが）の私もそこには臆病が出たことを鮮明に覚えてます。

そして2005年4月に広州総経理として赴任し、5年間の広州奮闘記の始まりです。

広州の事は、最近はお存知の方も多いかと思います。今年は広州市でアジア競技大会があり、中国経済発展の象徴のようところで中国全土からこの町に仕事を求めて押し寄せ、あっという間に巨大な都市に変貌したところです。

さて、広州赴任の苦労話ですが何から書けば分かりやすいか？どこまで書けばよいか？紙面の都合もあるしなあ、これが全てを表していると思います。ほんの一部の紹介になりますが、代表的苦労 社員の定着が悪すぎる、法律がすぐ変わる、社会変化が早すぎる、貪欲の4つです。日本の安定した生活に慣れてしまっているのか、中国の変化速度についていけないのです。個人単位でも感じるのは、国の発展に自分が遅れないよう真剣なんです。だから少しのチャンスでも、より良いと思えば躊躇せず職を変えますし、社内でも自分の評価や昇格機会が悪ければ、直ぐに見切を付ける傾向が強いです。作業も農村出身者が多く、出稼ぎ気分が数年勤めて故郷に帰ってしまうケースもよくありました。

職種によっても違うでしょうが、こと工場においては日本流にじっくり育ててなんて悠長な姿勢は彼らにとっては無意味のようです。要するに彼らは日本人以上に生活、将来に対して不安なんでしょう。顔では笑ってますが実際のところは社会から取り残されないように必死で戦っている事がよく分かります。

この姿勢に自分が慣れるまでに相当の時間が必要でしたが、ここは中国ですから自分の意識を変革するしかありません。全ては彼らのマインドを意識した経営を心がける事でようやく会社が回るようになりました。ただし日本経営の真髄を捨てることなく両立させる事が重要であって、そこが最も辛く困難な事だったと思います。

最後に、中国・中国人とはこうだ！なんて簡単に紹介なんか出来ません。とてつもない力、資源、人口、問題、多面性等を持った国ですのでこの先はどうなるか予想も付きません。

私がお伝えしたいのは中国はこうですではなくて、日本人はこのままでは簡単に負けてしまうという事です。これはテレビ等でも耳にする言葉ですが、長期駐在すると自分のこのように恐怖すら感じます。

今回の中国赴任を終えたとき、私自身がこんなに強く日本人を意識したことはありません。こんな経験や自分の意識を変えた中国赴任は一生涯の財産になった事は間違いなく、これからの生き方をもう一度考え直し、自己変革をしなくてはと思います。

締め中国から学んだ事・・・我慢する体力が残っているなら、抜け出すことに全力を注げ！ 負けるなニッポン人！！



現地社員と会社前でのスナップ 2010年2月

近況報告

「鈴商」、東京モーターショーに出展

平成22年度 機械会編集幹事

鈴木吉正

昭和46年卒



鈴木敏夫氏

機械会会員の皆様におかれましては、益々御健勝のことと存じ申し上げます。

さて小生、昭和46年卒の鈴木吉正と申します。

この度、機械会会長渡辺氏より、編集委員の役を仰せつかり、困惑している次第です。

何か珍しいことをご報告させていただこうと思っ

ましたが……

同期生の鈴木敏夫君を紹介させていただこうと思ひ、御報告させていただきます。

彼は、在学中から鈴鹿サーキットでレーサーとして活躍されていました。

卒業後は、……(× ? 省略)……として、現在に至っています。

現在は、「鈴商」の社名で車両の製作・販売を手掛け、また、輸入車の販売や修理も手掛けてみえます。

今回の御報告は、昨年の東京モーターショーに出品されたニューカー「スパッセV」(写真)を主に報告させていただきます。

昨年の東京モーターショーは、幕張メッセで開催されました。

小生は、幕張メッセ方面へは初めてなので、少しばかり苦労しました。

何故、小生が幕張メッセで開催される東京モーターショーへ行ったのかは……?

鈴木君から写真を依頼されて、……てな訳です。

さて、幕張メッセへ行く途中は近代的な建物ばかりで、名古屋とはずいぶん雰囲気が違うところだなと言う実感でした。

昨年の東京モーターショーは、10月24日から開催されました。

小生は鈴木君の計らいで、出品者用や関係者用の入場カードにて22日より入場させていただきました。

今回の東京モーターショーに出品された車は、ツーシーターのスポーツカーです。

諸元は、全長：3873mm、全幅：1953mm、全高：1160mm、排気量：2260cc 264PS/5500rpm

22日は、プレス関係者の日で、当然「鈴商」さんのブースにもプロのモデルさんと、プロのカメラマンもみえ盛んにシャッターを切ってみました。

このモデルさんが写った写真は、イギリスの車関係の本に掲載されたとのこと

そして、いよいよ一般見学者が入場できる日となり、当然たくさんの方々が「鈴商」さんのブースへも来場されました。

「鈴商」さんのブースはスタッフを始め、鈴木君、奥様・姪ごさん……でした。

そしてその姪ごさんが「鈴商」さんのモデルをなされ、見学者の御希望のポーズで撮影されました。

そして、外国人バイヤーも訪問され盛んに質問をされてみえました。

さらにプレゼンテーションも行なわれ、鈴木君が説明されると一段落ついたところで、主催者側のスタッフが英語で説明されるといった具合でした。

小生の実感ですが、昨今はハイブリッド車や電気自動車が目を集めている時代ですが、本来の車の楽しみを実感出来る車にも多くの方々がまだ関心を持ってみえるとの感想でした。本人もプラグインモーターに興味があると言ってみましたがまだ電池やモーターがこれからだといったように思います。

鈴木君の話では、これから走行テストを重ね車検を取得し、今年の秋頃に販売する予定とのこと

また、スパッセVの前には、スパッセ・ロードスターの製作・販売をされておりましたが、学生時代に学んだ基礎や専門の知識、またそれ以上に人間関係が、卒業後何年もたってからの“ものづくり”へとつながっていくことに大学の存在の大きさを感じていると鈴木君は言っておりました。

鈴木君の今後のご活躍を祈り、ご報告を終了させていただきます。

最後に、幕張メッセ近郊、スパッセ・スパッセV、プロモデル、姪ごさん、外人バイヤー、プレゼンテーションの写真を参照願います。



Supasse-V

2009年度 機械システム工学科の就職状況

機械システム工学科 就職委員
教授 大道 武生



2009年度の就職は昨年度の会誌に中間報告をさせていただきましたので、内容に重複がありますが、以下に2009年度報告を記載致します。

1. 概況

100年に一度の大不況といわれる中、2009年度の就職状況は従来にない厳しい状況でした。昨年の好調さがうそのようで、多くの学生が第一希望の企業に就職できなかったのではないかと考えております。学校推薦依頼の数が半減し、残念ながら、推薦を出した学生の内定率も昨年にくらべ大幅に低下しました。年度を通じて判ったことは、一流といわれる企業の採用数減少は、力のある学生にとってはあまり心配する必要はないのですが、下位にある学生には大変な影響があったということです。いわゆる一流企業の就職を突破できなかった理由に、論理的説明が弱い、学力が低いということが多くみられたことは、教育のありかたについて教員もじっくり考える必要があることを示唆しております。また、学生も世間の風評に一喜一憂することなくしっかりと地力をつけること、特に、自分の頭で考える習慣を持つことが最大の就職活動であると確信いたしました。

最終的な内定率は96%で、全国平均は大きく上回りましたが、従来からの100%は継続できませんでした。また、超一流企業ではトヨタ自動車に大学院生が受かっただけで、旧財閥系等を含めうまくいきませんでした。幸いに、学生人気の高い地元のトップ企業には未だ多くの内定者があり当学科の現状を明確に示しているのかもしれませんが、学科としては、学生の足腰と頭を鍛えること、および、機械会の皆さまとも連携した地域企業との地道なチャンネルづくりを強化して、厳しい状況を乗り切っていく必要があると考えます。

2. 近年学生の傾向と課題

・ 厳しい就職状況の中でも半数以上が自由応募方

式を選んでおります。したがって、必ずしも相手企業の要請に応じた学生を推薦することができず、推薦組の内定率が下がる要因となっています。推薦制の活用重点化をはかる必要があります。

・ 本年度の特徴の一つは、いわゆる社会常識の欠落した学生の増加であります。このための指導対策を講じ、次年度の就職担当に申し送りました。

・ 本年度は大学院生の就職は必ずしも希望に沿ったものではありませんでした。特に、力の弱い学生の苦戦が目立ちました。大学院での一層の知の指導強化が必要となっています。

3. 内定企業抜粋

・ 大学院生：アイシン精機・AW、三機工業、大同特殊鋼、東海理化、豊田合成、マキタ、山崎マザック、ジェイテクト、大同メタル、豊田紡織、富士機械製造、他、

・ 学部生：アイシン精機・AW・AI、ホンダ、アンデン、シロキ工業、大同メタル、東海理化、三菱エンジニアリング、トリニティー工業、トヨタ鉄工、豊田紡織、フジキカイ、フタバ産業、ヤマサキマザック、リンナイ、愛三工業、ダイフク、中日本ハイウェイエンジニアリング、朝日工業、トーエネック、パナソニック電光、KVK 他

第3回名城大学機械会「機械会賞」授与式

平成21年度〔第3回〕

名城大学「機械会賞」受賞者

(平成22年3月19日受賞)

学年	学籍番号	氏名	所属研究室
4	060427127	早川 優輝	生産・福田ゼミ
4	050427337	塚本 康博	熱・小島ゼミ
4	050427375	伊藤 剛	設計・大島ゼミ
4	050427392	北山 隼平	流体・久保ゼミ
4	050427503	三津山 忍	制御情報・楊ゼミ
4	050427590	石川 知樹	固体・江上ゼミ



第3回「機械会賞」受賞者 2010.3.19

第2回機械会杯ゴルフ大会開催について

昨年の11月1日(日)に第1回機械会杯ゴルフ大会を行いました。S42年卒からH1年卒(S42年生まれ???)と年齢差は幅広かったですが、スコアは実に僅差の白熱した大会になりました。

今年も第2回目を開催します。多くの会員皆様の参加をお持ちしています。

1. 日 時：平成22年10月31日(日)9時頃 IN・OUTスタート 閉会16:30予定

2. 場 所：名古屋グリーンカントリークラブ 西コース 予定

〒470-0424 愛知県豊田市御作町釜土1188-1

TEL 0565-76-4111 (URL : <http://www.ngcc.co.jp/>)

3. 出場資格：機械会会員及びその家族と同窓会関係者

4. 会 費：未定 [プレー+参加費 ¥20,500(昨年実績)]

5. 競技方法：ダブルペリア方式(生年月日記入) 競技終了後 表彰式を行います。

6. 申し込み：メール及びFAXにてエントリーください。

7. 締め切り：平成22年10月12日(火)までに 担当：渡辺・小杉

【問い合わせ先】Tel : 090-9126-3757 Fax : 0565-28-5483 [機械会会長：渡辺治比古(S57)]

E-mail : watanabeh@shinmei.co.jp

9月初旬ホームページで詳しくお知らせします



平成21年度事業報告

平成21年度の事業経過は以下の通りです。

1. 名城大学機械会誌第43号を発行し、会員各位に送付した。
2. 名城大学機械会誌第52回総会を次の通り開催した。
 - ・日時：平成21年6月21日(日) 9:30～10:20
 - ・場所：名城大学12号館303教室
- * 審議・報告事項 *
 - (1) 渡辺会長挨拶の後、平成20年度事業報告および会計報告がなされ、承認された。
 - (2) 平成21年度事業計画(案)および予算(案)について審議し、承認された。
3. JABEEに伴う外部評価委員会の活動への参画
4. 平成21年度(第9回)機械会「新春交流会」が70余名の出席者のもと、盛況裡に開催された。
 - ・日時：平成22年1月23日(土)
(18:30～20:45)
 - ・場所：ホテル名古屋ガーデンパレス
(中区錦3)
- * 今年度の「新春交流会」は二部構成として、一部行事において講演会「ふとん名人」を開催した。
 - ・講演者：丹羽正行氏(本会会員 昭和48年卒)
「藍綬褒章」受章(平成21年春の叙勲)
5. 定年退職者(本年3月)への記念品贈呈および本会功労会員への表彰状と記念品授与を、上記の「新春交流会」開催時に行った。

6. 次の学生行事に対し援助を行った。
 - (1) 名城大学機械会杯(40回)&機械工学科長杯争奪ソフトボール大会('09.9.4)への援助
* 前田副会長が出席して挨拶および始球式を行い、親睦会において、優勝チーム(福田ゼミ)に賞状、機械会杯および優勝旗が授与され、準優勝チーム(大槻ゼミ)および3位チーム(藤山ゼミ)にそれぞれ、賞状および副賞が手渡された。なお、今年度の日本機械学会東海学生会・第39回畠山杯争奪ソフトボール大会へは参加しなかった。
 - (2) 平成21年度卒業記念パーティー('10.3.19(金))(於 名古屋ガーデンパレス)への援助
* 渡辺会長および祖父江副会長が出席して卒業生に対し祝辞を述べるとともに、第3回「機械会賞」として、優れた学生6名に賞状および記念品を授与した。
 - (4) 準会員(在校生)へ機械会誌「43号」を配布した(上記6(2)卒業時('10.3.19))した。
7. 機械会役員会・評議員会の開催
平成21年度において、4回の役員会(平成22年2月27日(土)最終)および6回の評議員会(平成22年3月6日(土)最終)を開催し、種々審議を行った。

平成22年度事業計画(案)

本会会則に掲げる本会の目的達成に必要な事業を行うほか、本年度は特に次の事業を中心として活動する。

1. 名城大学機械会誌第43号を発行し、会員各位に送付
2. 機械会評議員会および役員会の開催
3. 名城大学機械会誌第52回総会開催
4. 平成22年度(第10回)機械会「新春交流会」開催
5. JABEEに伴う外部評価委員会の活動への参画および援助
6. 次の学生行事に対し援助を行う
 - (1) 名城大学機械会杯(第41回 記念大会)&機械工学科長杯争奪ソフトボール大会
 - (2) 日本機械学会東海学生会・第40回畠山杯争奪ソフトボール大会への援助
 - (3) 平成22年度卒業記念パーティー
7. 準会員(在学生)へ機械会誌「44号」を配布
8. 平成22年度「機械会賞」の贈呈
9. その他